

いやあ～とってもありそうなお話ですね。そういう意味では大阪弁で断る時の「イイです」はむつかしいかもですね。「良いです」ともとれますもんね。「いいません。」と言ったほうが伝わり易いですよね。そんな僕たちが普段何気なく使っている言葉の数々。発達障がいを持つ人たち、子ども達には解りにくい表現のものも多数あるのかもしれないですね。支援者側でもう一度その辺を共有しておく必要があるのかもしれない。

久田

第 45 回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

「気にしてないよ」

今回は「気にしてないよ」事件です。アスペルガーのある男の子のはなしです。マモル君は図鑑で昆虫のことをよく調べるようになりました。いろいろな虫の名前を覚えています。学校では昆虫博士と呼ばれています。そんなマモル君は、ある時、アリジゴクのことについて調べてみました。図鑑には「アリジゴク」は幼虫で、成虫になると「ウスバカゲロウ」になると書いてありました。このとき、マモル君は「ウスバカゲロウ」という音の響きを面白いと感じたのです。それは「ウスバカ」「ゲロウ」と読めたからです。このようにして、ことばを分けて遊んでいた時のことです。たまたまそばを上級生のユイちゃんが通りかかりました。そして、ユイちゃんに「ウスバカユイ」と言ってしまったのです。とうぜんユイちゃんは怒ります。「マモル君何を言っているのよ。ひどいじゃないの。」たまたま通りかかった先生に、ユイちゃんは「マモル君が私のことをウスバカユイと言うんです。ひどいです。」それを聞いた先生は、マモル君を教室に呼んで、「マモル君、人の名前を呼ぶときには、ちゃんと名前呼びなさい。変な名前を付けて呼んではいけません。」と注意をしました。注意されたマモル君は今にも泣きそうです。「マモル君、ユイちゃんにちゃんと謝っておいで、わかりましたか?」。マモル君は、「はい」と答えて、ユイちゃんに謝りに行きました。そして、ユイちゃんに「ウスバカユイとってごめんなさい」と謝りました。そのときユイちゃんは、「誤ってくれたらそれでいいのよ。もう気にしていないから」と答えました。その答えを聞いたマモル君は、泣き出しそうな顔から急に笑顔になったのです。そして先生の所に報告に行きました。そして、「先生、ユイちゃんはウスバカユイと言われても気にしていないんだって、ぼくはよかった」と言ったのです。そしてまた「おい、ウスバカユイ」と言ってしまったのです。このエピソードもよくあることです。マモル君は「いいのよ、気にしていないから」ということばを字義通りにとってしまったのです。「ユイちゃんはウスバカユイと言われても気にしていないんだ」と理解したので笑顔になったのです。「許してもらってよかった」ということではないということです。「悪いことをしてしまった」と感じている場合には、その後、同じことを繰り返して言ったりすることは無いと考えられるからです。このような場合には、ユイちゃんに「気にしているから、ウスバカユイとはもう言わないでね」と言ってもらうように伝えておくことです。周囲の人の協力を得ることで、人によって対応が大きく違うということがないようにしなければなりません。マモル君がどう理解するのかということを、予測することも重要な技術だと思います。ユイちゃんにこのような対応をいつも求めることは、難しいこともあると思われますが、少なくとも指導者同士は、共通理解をしておく必要があると思うのです。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里) クラスルームコミュニケーション (こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア (エンバフメント研究所) など